

# 一人娘の就職から捉える現代中国女性の ライフスタイルと親子関係

—浙江省紹興市の事例から—

陳 予 茜

中国の一人っ子政策のもとで生まれた一人娘は家族の「Only Hope」として、子どもの頃から親に教育を重視され、親から多くの投資を受けながら、高い学歴と条件のよい就職先を期待されている。しかし彼女たちは一旦社会に出ると、ほかの中国人女性と同様に女性というジェンダーによって労働市場で差別をうける恐れがあり、就職は必ずしも親子の期待通りになるとは限らない。本研究では一人娘の就業に関するインタビュー調査を通して、一人娘とその親が考える理想的な女性のライフスタイルと親子関係を考察した。その結果、一人娘本人もまたその親も、一人っ子かつ女性という娘の属性を自覚し、それにより娘が地元に戻って、公務員という「体制内」の職業に就くことを望んでいることが明らかになった。親子は共に仕事と家庭を両立させることのできる安定性の高い生活を女性の理想的なライフスタイルとして、そして親密で相互援助ができる親子関係を理想の親子関係として考えている。この点から、一人娘の就職は親子の理想を実現するための重要なイベントとして位置づけることができる。

キーワード：一人娘，就職，ライフスタイル，親子関係

## 1. 研究背景と研究目的

中国には「成家立業」という諺がある。これは人が一人前の大人としてみなされたければ、家庭を築き、仕事を持つ必要があることを意味する。しかし今日の中国では、その順番はむしろ逆となり、「立業成家」（就職してから家庭を築くこと）のほうが一般的になってきた。その理由は、仕事を持たないことは

家庭を築く能力がないことを示唆しているからである。ゆえに子どもにしても、また彼らの親にしても、「立業」を前提にしない「成家」は望まないものである (Zheng 2016)。

「立業」すること、すなわち中国における就業の形式が大きな転換点を迎えたのは、1990年代である。当時、計画経済期に施行されていた都市と農村の二元政策や「統包統分」<sup>1)</sup>制度などが、市場経済の導入によって廃止された (張・沈 2016)。これにより、個人は地域間の移動と職業選択の自由を手に入れることができるようになったが、その一方で就職、転職、失業などに伴うリスクも総て個人で負わなければならなくなった (Bian 1994)。こうした変化のもとで、就職をめぐる個人間の競争が激しくなり、学歴は個人の競争力を測る重要な指標となったのである (Kuan 2015)。それに伴い、若年層の学歴が上昇し始め、さらに若者の大学進学による地域間の移動も盛んになった (車ら2016)。とりわけ本研究の調査対象である1980年代から1990年代前半生まれの一人娘は、一人っ子世代の一員として、中国が男女平等でジェンダーの公正を実現する社会になれるか否かの重要な指標として捉えられてきた (小浜 2020)。また一人娘は家族の「Only Hope」であるため、子どもの頃から親の投資と関心を一身に受け、高い学歴と条件のよい就職先を期待された (Fong 2004)。しかし、現実では高学歴であることは、必ずしも彼女たちのよりよい就職先を保証することにはならない。その理由は、一人娘はほかの中国人女性と同様に、女性という性別によって労働市場から差別を受けたり、あるいは妻や母という家庭内の役割を社会に期待されたりするからである (Liu 2017)。

このように一人娘は、一方では親から投資と関心を一身に受け、親に幸せな人生を送ることを望まれる。他方では、彼女たちは労働市場においてジェンダーによる差別を受ける恐れがあり、就職は必ずしも親子の思いどおりになるとは限らない。こうした背景のもとで、既存研究では一人娘の親は娘が公務員という職業に就き、安定した人生を送ることを娘の理想的なライフスタイルとして考えていることが指摘されてきた (Zheng 2016)。しかし、「親は自らの理想を娘に実現してもらえるのか、また娘は親の理想をいかに捉え、親の理想にどのように応えるのか、それとも自分なりの理想を持つのか。さらには、親子の理想は今日の中国社会におけるジェンダー不平等という現状とどのように関連するのか」といった問題に対する包括的な検討はまだ十分とはいえない。したがって本研究では、中国浙江省の紹興市に在住し、そこで働く一人娘を研究対象とし、彼女たちの就職をめぐる親子がそれぞれ抱く期待を考察する。こうした考察を踏まえた上で、最後に一人娘とその親が理想と考える女性のライフスタイルは今日の中国の社会状況とどのように関連するのかを提示したい。

## 2. 先行研究の整理

中国女性の就労はつねに個人、家族、国家という三者の関係性のなかで規定されている。なかでも1980年代から始まった改革開放という中国経済の市場化と活性化に重点を置いた政策の実施は女性の就労に大きな影響を及ぼした(譚・遠山 1997)。当時の政府は計画経済から市場経済への転換を通して、国全体の経済を発展させようとした。これに伴い、中国女性の就労も、計画経済期と市場経済期という二つの経済システムに分けて考えることができる。

まず計画経済期(1949年から1980年代まで)では、国家は労働力を確保するために女性の社会進出を推奨していた。その結果、女性の就業率が急速に上昇し、ピーク時にはその割合は80%以上にも達した(石塚 2010)。また瀬地山(1996)によれば、計画経済期における労働者の賃金は低く、男性の賃金のみで家族を養うことがほとんど不可能であったため、女性は家事、育児のほかに、働くことも期待された。ゆえに、計画経済期の女性は仕事と家庭の両方を担う必要があり、二重負担が先行研究では問題視されてきた。さらに当時は、子どもはまだ生産財とみなされており、社会全体の出生率は現在に比べて高かった。特に1960年代の合計特殊出生率は高く、その数値は6までに達したと報告されている(国家統計局 1999)。また男児選好の観点から、子どもが多い家庭では、進学や就職のチャンスを掴むことができるのは往々にして息子であり、娘は後回しにされる傾向にあった(Bauer et al. 1992)。ここからは、計画経済期における女性は教育を受けるチャンスが少なく、就業率が高いわりに、賃金が低いという特徴があることがうかがえる。また親は娘の就労を息子ほどには重視しなかったが、先述したとおり既婚女性の場合、労働と家庭の二重負担が重くのしかかった。そして計画経済期の就労は、周知のとおり国家によってコントロールされていたために、人びとは自由に就職地と就職先を選択することが困難であった。

しかし1980年代に入ってから、計画経済の問題点、例えば、従業員数の過剰、生産効率の低さなどが露呈し、この問題を解決する政策として、市場経済が導入された。市場経済の導入は女性、家族、国家の三者関係に再び大きな影響を及ぼし始め、その結果として、女性の就労は以下の特徴を有するようになった。

一つ目の特徴は、女性の就労は女性本人だけではなく家族全体のイベントと化した点である。市場経済の進展とともに、計画経済期に行われていた諸制度が撤廃された。なかでも、「単位」制度<sup>2)</sup>撤廃の影響は大きく、国家機関や国营企業という「体制内」<sup>3)</sup>の社会機構における「単位」以外は、政府は個人の生活全般に関わる事業から撤退した。ただしその代わりに、人々は、従来、

国家から受けてきた一部の福祉サービスも享受できなくなった。このような状況のもとで、家族はふたたび個人が生活を送るうえでの基本単位となり、家族成員間の相互援助が重要となった (Zuo 2012)。また女性の就労も、本人のみならず、親 (Zheng 2016)、配偶者 (辺 2006)、子ども (鐘・郭 2018) の意見やニーズに左右される家族的なイベントとしてみなされるようになった。

二つ目は、労働市場における女性への差別と女性の就業率の低下である。前述したように、市場経済の進展によって「統包統分」制度が1990年代半ばに廃止された。これにより若者はかれらの親世代のように国家から仕事を割り振られることがなくなったため、自力で仕事を探さねばならなくなった (Bian 1994)。また国有企業の改革により、大勢の人々がリストラを余儀なくされたが、そのなかでも中高年女性がリストラされる割合はとくに高く、次第に高学歴の女子大学生ですら就職が困難になりはじめ、結果として女性の就業率が低下した (李 2016)。2020年のデータをみても、中国女性全体の就業率はすでに70%にまで下がり、特に都市部女性の就業率は農村部女性の就業率よりさらに低く、66.3%しかないという (中国婦女社会地位調査組 2021)。

三つ目は、女性の高学歴化と就職活動に伴う大学生の「Uターン」現象の発生である。市場経済のもとで、就職活動の競争が激しさを増し、学歴は個人の能力を測る重要な指標となった。ゆえに唯一の子どもに資源を集中的に投入できる一人っ子の親、特に一人娘の親は子の性別を問わず、娘に息子と同等の教育投資をし、娘がよい学業を修めることを望んでいると先行研究では指摘されてきた (Xu and Yeung 2013)。このような女性の高学歴化にも関わらず、近年では、地域間の経済格差や大都市の人口過剰といった社会問題を背景に、大都市に進学した地方出身の大学生が地元に戻る大規模な「Uターン」現象が生じている。2015年に実施された新卒大学生の進路調査によると、469名の回答者のうち31.5%が「地元には戻りたくない」と答えているものの、41.8%が「地元に戻りたい」と答えている (車ら 2016)。ここからは、高学歴化は必ずしも女性の大都市での就職や定住の意欲を促進するとは限らないことがうかがえる。

以上の現状に対応するために、既存研究では、一人娘の親は娘にとって理想のライフスタイルとは、娘がキャリアで成功すること、すなわち公務員という体制内の職業に就き、安定した生活を送ること (Zheng 2016)、または娘が自分の趣味を持ち、自己実現ができること (Liu 2017) であると考えていると指摘されてきた。しかしこのように親の理想が変わったとはいえ、親は自分の理想を娘に果たして実現してもらえるのだろうか。また娘は親の理想をいかに捉え、それをよしとするのか、それとも親の理想を拒み、自分なりの理想を追求

するのか。これらの問いは、一人娘とその親が考える理想的な女性のライフスタイルを解明するにあたって重要な視点であるだけではなく、女性と彼女たちの親が自分をどのように中国社会に位置付けているのかを理解する際にも重要であると考えられる。

したがって本研究では、中国沿海部にある浙江省紹興市に在住する一人娘の事例を取り上げつつ、一人娘とその親が持つ就職をめぐる期待について分析する。その上で、親子が考える理想的な女性のライフスタイルと今日の中国の社会状況との関連性を提示する。

### 3. 調査概要

#### 3-1 調査対象と方法

本調査は一人娘のライフコースを通して彼女たちとその親との関係性を検討するために、2019年8月、2020年8月、2021年8月の計三回にわたって、中国浙江省の紹興市で実施した。2019年の調査は現地で行ったが、2020年と2021年の調査はコロナ禍で、現地に行くことが困難であったため、中国版のLineと呼ばれる Wechat のビデオ通話を利用して、オンラインで行った。

調査はスノーボール・サンプリングという手法を採用し、紹興に在住し、親が健在で、かつ仕事を持つ一人娘、計40名から協力を得た。事前に対象者に調査の目的と内容、自由意志に基づく回答、途中で回答の中止や拒否が可能であること、研究成果は学術目的のみで利用すること、論文中や表の中の人名を仮名で表示することを説明し、同意を得た上で半構造化インタビューを実施した。一回の所要時間は70分から140分程度で、「就職」「恋愛結婚」「子育て」「帰属意識」という四つのカテゴリーの聞き取り調査をした。本研究ではこのなかの「就職」に焦点を当てる。その際、「就職地の選択」と「就職先の選択」という項目を中心に質問をした。具体的には、1. 「なぜ就職地を地元にしたのか」、2. 「地元に戻るといふ選択はあなたか、それとも親の考えだったのか」、3. 「初職はどのように見つけたのか、またなぜその仕事を選んだのか」、4. 「親はあなたの初職についてどう考え、あなたの就活にどのように関わってきたのか」という内容である。なお、分析に用いるデータはすべて日本語に翻訳しながら文字起こししたものである（括弧内は筆者による補足である）。

調査対象の基本情報は表1にまとめたが、全員が一人っ子政策（1979年-2015年）の実施期間中に生まれた、2022年現在、29歳から43歳の女性たちである。まず学歴からみれば、40名のうち37名は大学以上の学歴を持つため、高学歴者が多いと言える。また初職の職種と年収については、対象者は（準）

公務員、銀行員、教員という安定した収入を得ることができる仕事を選ぶ傾向にあり、実際にほとんどの対象者が紹興の平均以上の収入を得ていることがわかった。最後に、職業の属性を確認したところ、体制内と体制外の人数は約半々の19名と21名である。ただし、体制外の仕事のポストは体制内を遥かに上回っているため、ここから本調査の対象者の体制内に就職する割合は相対的に高いことが確認できる。

### 3-2 調査地の紹介

浙江省北東部の商工業都市である紹興は、上海や杭州と同じく経済発達地域と言われる長江デルタ経済圏に属す。2020年の都市部の一人当たりの可処分

表1 調査対象者の基本情報（150頁に続く）

名前	出生年	学歴と学校所在地	職業と職業属性 (初職)	年収 (万元)
趙さん	1979	高専、地元	会社員、体制外	6
銭さん	1981	高校、地元	会社員、体制外	7
孫さん	1982	大学院、省外	大学教員、体制内	不明
李さん	1982	大学、省外	デザイナー、体制外	8～9
周さん	1983	短大、地元	会社員、体制外	8
呉さん	1983	高専、省内	看護師、体制内	10～20
鄭さん	1984	大学、地元	看護師、体制内	10～20
王さん	1984	大学、省内	公務員、体制内	20
馮さん	1984	大学、省内	看護師、体制内	12
陳さん	1986	大学、省内	銀行員、体制外	10～20
礎さん	1986	大学、省内	不動産、体制外	50～60
諸さん	1986	大学、地元	不動産、体制外	20
衛さん	1986	大学、省内	教員、体制内	17
将さん	1987	大学、省内	警察、体制内	20
沈さん	1987	大学、省外	公務員、体制内	20
韓さん	1988	大学、地元	自営業、体制外	不明
楊さん	1988	短大、地元	会社員、体制外	8
朱さん	1988	大学、省内	会計士、体制外	15
秦さん	1988	大学、省外	会社員、体制外	8
尤さん	1988	大学、省内	銀行員、体制外	20

許さん	1989	大学、省外	公務員、体制内	20
何さん	1989	大学、省内	教員、体制内	13
呂さん	1989	大学、省外	準公務員、体制内	15
施さん	1989	短大、省内	会社員、体制外	20～30
張さん	1990	大学院、海外	銀行員、体制外	不明
孔さん	1990	大学、省外	準公務員、体制内	8
曹さん	1990	大学、省内	会社員、体制外	30
厳さん	1990	大学、省内	準公務員、体制内	13
華さん	1990	大学、省内	会社員、体制外	不明
金さん	1990	大学、省内	公務員、体制内	10～20
魏さん	1990	大学、省内	公務員、体制内	20
陶さん	1990	大学、省内	教員、体制内	10
姜さん	1991	大学、省外	空港職員、体制内	10～15
戚さん	1991	大学、省内	会社員、体制外	7.5
謝さん	1991	大学、省内	準公務員、体制内	20
州さん	1991	大学、省外	銀行員、体制外	20
於さん	1992	大学、省内	公務員、体制内	10～20
柏さん	1992	短大、省内	不動産、体制外	9
水さん	1992	大学、地元	デザイナー、体制外	13
章さん	1993	大学、省内	会計士、体制外	7

所得を見てみると、全国平均の438,34元<sup>4)</sup>に対して、紹興、杭州、上海はそれぞれ666,94元、686,66元、764,37元である（国家統計局 2021; 国家統計局紹興調査隊 2021; 杭州市人民政府 2021; 上海市人民政府 2021）。このデータからは、紹興住民の経済力は全国平均より高いと言えるが、杭州や上海などの大都市のそれに比べれば低く、大都市との経済力の差は依然として大きいと言えよう。その一方で、近年では、紹興市は人材を確保するために、若者向けの人材優遇政策を打ち出しており、また実際に一定の効果が得られたと報告されている（紹興市人民政府 2020a）。さらに紹興は一人っ子政策をいち早く導入し、かつ厳格に実施した地域であり、多くの一人っ子家庭が存在している（紹興市人民政府 2020b）ため、本研究の調査地として適切であると考えられる。

## 4. 分析

### 4-1 就職地の選択

表1に示したように、40名の対象者のうち32名は地元以外の地域で最終学歴を修得したにもかかわらず、30名<sup>5)</sup>が地元に戻って就職することを選んだ。こうした高い「Uターン就職」の理由、つまり対象者と彼女たちの親はなぜ地元を理想的な就職地として選んだのかという理由については、以下の原因が考えられる。その結果を以下に記す。

#### 4-1-1 本人：現実的な条件と親の気持ちやニーズを重視する

就職地を選択するとき、対象者本人は地元と大学所在地とを比較する傾向があり、とくに生活にかかるコスト、生活を送るうえでのあらゆるプレッシャー、就職活動における自身の競争力、ネットワークや人的資源の有無という四つの側面から勤務地を総合的に判断し、選択を行っていることがわかった。例えば、呉さんと王さんは以下のように語った。

杭州や上海でも仕事を見つけられるが、住宅を購入するとすると、経済的にはやっぱりプレッシャーが大きい。大学のクラスメートも地元に戻ったし、私もみんなに合わせた。しかも地元のほうが人的資源を持っているので、戻ったほうがいい。(呉さん)

大学は杭州にあったが、家族、親族、友達、つまり(人的)資源が全部紹興に集中している。だから、総合的に考えれば、やっぱり紹興に戻った方がいいと思った。(紹興は)都市として小さいけれど、豊かだし、生活のストレスも杭州よりは小さい。上海はそれ以上に無理だね。うちの大学は省内ならば(知名度が)高いほうだけでも、(就職をする上では)上海(の大学)に比べたら競争力がない。(王さん)

ここからは呉さんと王さんが大都市における生活コストの高さと学歴に象徴される激しい競争社会に言及しながら、就職活動においては地元ですでにあるネットワークの活用を重視していることがうかがえる。具体的には生活コストについては、近年では、大都市における不動産の価格が著しく高騰しているため、地方出身者は大都市に定住することがますます困難になりつつある。ゆえに呉さんは仮に大都市で就職ができたとしても、住宅を購入するまでの経済力がないと述べたと考えられる。また自らの競争力について、王さんは一流の大

学を卒業したのにもかかわらず、上海では太刀打ちできないと考えていることから、大都市で働くことで予想される激しい競争の回避が、対象者が地元に戻る一つの要因であることがわかる。さらに生活コストや競争以外に、地元にある人的資源やネットワークに触れる対象者もいた。例えば、馮さんは以下のように述べた。

親元にいるなら、家賃はもちろん、家事、料理などの心配がいない。しかも地元では多かれ少なかれある程度の（人的）資源を持っているから、比較的に就職しやすいと思う。（馮さん）

このように馮さんは生活全般の面倒を親に見てもらえる可能性があること、生活費を節約できること、地元には人的ネットワークがあることを地元に戻って就職したことの理由として挙げており、ここからは親がそばにいて日頃からサポートをしてくれる生活を理想として考えていることがうかがえる。馮さんが大都市で生活する経済力はなく、生活面でも親の援助が必要であると述べているように、対象者の多くは、大都市におけるワークライフバランスの実現が現実的ではないことにうすうす気づいている。こうした考えの下で、対象者は地元に戻ることを選んだのである。その一方で、親の気持ちやニーズ、つまり親子関係という観点から地元に戻った対象者もいる。これについては、まず海外留学や上海の大手金融機関に勤務した経験がある張さんの例を紹介する。

一人娘は家族の気持ちを考えないといけない。よい嫁ぎ先を見つける前に親から離れ（て生活する）ことは、親に大きなプレッシャーを与えた。私はプレッシャーを抱えて、健康状態が悪くなった親をみると、自分はわがまますぎるんじゃないかと思った。親は私のことを愛しているが、その反面、支配欲も強い。（張さん）

このように一人っ子という自らの属性を自覚する張さんは、自分の気持ちより親の気持ちを優先し、大都市に残るよりも、地元に戻って就職し、結婚することを選んだ。彼女は親に対して強い責任感を持っているため、親の期待に応えることができなかった昔の自分をわがまますぎたと反省した。他方、金さんも同じく自分の一人っ子という属性に言及した。

当時（就活の時）、私は自分が一人娘であることを自覚し、親から遠く離れ（て就職する）のはよくないなあと思った。親のそばにいて、親

にもっと時間をかけて付き添ってあげたいと思った。(金さん)

杭州にあるトップクラスの大学を卒業した金さんは、卒業後に紹興に戻ることを選んだ。彼女は親の唯一の子どもとして、また娘として親のそばにいる義務があると考えている。このように一人っ子という属性は、対象者の親子関係に影響を及ぼしており、親との親密な関係を維持するために、対象者は就職活動をする際に地元に戻る傾向にあることがうかがえる。また陳さんも金さんと同じく親のために地元に戻ったが、彼女は親の健康状態をその理由として挙げている。

私は最初から親のそばにいたかった。親の健康状況がよくなって、そばにいたほうが（看病や何かがあったときに）動きやすい。(陳さん)

以上のことから、陳さんは親のニーズに基づき、自分の就職地を選んだことがわかる。彼女は張さんと金さんのように一人っ子という自身の属性について特に話題に取り上げることはなかったが、子どもは親の面倒をみる責任があるという意識を持っている。ここからは親との良好な関係性を維持したいと願う、対象者の家族意識の強さがうかがえる。この意識が対象者の就職地の選択に大きく関わってくるのである。

#### 4-1-2 親：一人っ子と女性という娘の2つの属性を意識し、親子関係の維持を重視する

対象者によれば、彼女たちの親は一人っ子と女性という娘の2つの属性を非常に意識しているという。親は彼女たちをそばに置きながら、いままで通りの親子関係を維持しようとする。これについて、まず親に自分の一人っ子という属性を指摘された孔さんと衛さんの語りをみてみよう。

(子どもが)一人っ子ならば、親がだいたい溺愛するじゃない？親は以前私に「紹興にいるなら、何かあった時に助けてあげられるが、東北(大学所在地)に残ると、遠水は近火を救えない」と言った。(孔さん)

このように東北にある大学に進学した孔さんは、一人っ子であることを理由に、就職活動の際に親から地元に戻るよう言われた。親は尤さんに対する保護欲が強く、尤さんの今後の人生にかかわるのはもちろんのこと、尤さんのニーズに沿って引き続きサポートを提供することも想定している。また同じく一

人っ子という属性によって親に地元に戻るよう言われた衛さんは、当時の状況を以下のとおり振り返る。

親はいつも「私たちにはあなたという娘しかいない。もしあなたが遠いところに嫁に行っちゃったら、すべてが終わりだ」と言っている。だから、私を（地元）に戻らせた。このような意識がいつの間にか私の中に根付いていた。（衛さん）

以上の語りから、衛さんの親は娘が遠いところに嫁ぐことを恐れて、就職地を選択する段階で娘を地元に戻らせたことがわかる。つまり親にとって娘が他の地域で就職し、結婚することの意味とは娘を「失う」ことの意味に近く、この事態の発生を未然に防ぐために、衛さんの親は娘に「遠いところに行つてはいけない」という考えを日頃から教え続けてきたと言えよう。他方、一人っ子というよりも女性であることを理由に、親に地元に戻ることを要求された対象者は以下のように述べた。

うちの母の考えは伝統的で、彼女は女の子は（親の）近くにいるべきだと考えている。そうじゃないと、彼女は（親として）安心できないと思つている。（秦さん）

親は普段から私に「（地元）戻ってきてほしい、そばにいてほしい。女の子は遠くに行くべきではない」とか「電話をかけて、連絡を増やしてね」というような話を言い続けてきた。（謝さん）

子どもの頃から、親は私に「女の子は遠くに行かず、地元で就職すればいい」と言い続けてきた。（章さん）

このように3名の対象者の親は娘の女性という性別を意識し、女性は親の近くにいるべきだと考えている。しかも親は対象者が子どもの頃からずっと、そのことを対象者に言い聞かせ続けてきたため、対象者は長期にわたって親の影響下にあると言える。また謝さんの親は頻繁に連絡するよう伝えて、娘に情緒的なサポートを求めている。さらに章さんの親は女性の他地域での就職を否定的に捉えているものの、女性の就労自体を否定していないことから、女性の就労の必要性を少なからず認めていることも読み取れる。

## 4-2 就職先の選択

### 4-2-1 本人：安定かつワークライフバランスの取れる仕事を理想とする

調査概要で記述したように、本研究の調査対象の約半数は体制内に就職した。では、対象者は自分の仕事に何を求め、何を理想的な職業として考えているのだろうか。また親は彼女たちの仕事に何を求め、彼女たちの就職にどのように関わってきたのか。これらの問いを解明するために、まず対象者本人の考えをみてみよう。

私はインターネットで募集情報を探して、そこにエントリーして、試験を受けてみたら、合格した。女の子だから、安定性のある仕事がいいなと思った。何故ならば、政府機関（体制内）にいれば、リストラされる心配がないから。（孔さん）

このように孔さんは自身が女性であることを理由に、仕事に安定性を求め、体制内の仕事を選んだのである。また「リストラされる心配がない」という雇用の安定という観点からは、今日の雇用環境の不安定さ、および継続的に就業していきたいという対象者の意欲がうかがえる。また同じく体制内に就職した孫さんは、体制内の仕事の魅力を以下のように語った。

仕事は比較的に楽で、柔軟性もある。何かがあったときに、少し席を外したとしても大丈夫だし、子どもの面倒や家庭のことなど（が両立できる）。（孫さん）

孫さんによると、体制内の仕事は家庭との両立を比較的实现しやすいため、ワークライフバランスを重視する彼女は体制内の仕事を選んだのである。つまり体制内に就職した対象者にとって、仕事の安定性とワークライフバランスの実現が重要である。他方、体制外に就職した対象者は以下のように語った。

母は私に仕事を紹介してくれたが、私は断った。（というのも）自分の力で探したかった。何と言っても、私は学校で「優秀学生」（という奨励賞をもらった人）だから、1年を期限にすると母と約束して、自分で（デザイナーの仕事）を探した。（李さん）

このように李さんは大学を卒業したあと、母親に仕事を紹介してもらったが、デザイナーとしての自分の実力を試したい、かつデザイナーになりたいという理

由で、母親と1年間限定の就職活動の約束をし、仕事を探していた。その結果、李さんは実際にデザイナーになることができた。ここからは、安定性やワークライフバランスの追求のみならず、就職を通じて、対象者は自分の夢や目標を叶えようとしていたことが確認できる。ただし李さんのケースは体制外の仕事に就いた全員に当てはまるものではなく、諸さんと秦さんのように体制内に就職することが失敗したことを契機にやむを得ず体制外に就職した一人娘もいる。

(私は)公務員になれなくて、(大学は)文系だし、だから事務の仕事しかなかった。それで、当時、私はある会社の事務職に応募し、そちらに就職した。(諸さん)

大学を卒業した時、私は親に「仕事を紹介してあげられるだけの能力がない」と言われて、私は親の言うことに納得できたので、公務員試験を何度も受けたのだけれども、それも全部落ちてしまったので、(今度は)新聞の募集情報に従って(応募してみたら)、政府関係の電話相談センターのオペレーターになることができた。(秦さん)

このように諸さんと秦さんは公務員という体制内の仕事を理想と考えたが、両者ともその夢を実現することはできず、最終的に体制外に就職したのである。こうした二人の理想と現実とのギャップからは、中国の若者の就職における競争の激しさが垣間見える一方で、若者は就職を自分の生活基盤を確保する手段としても捉えていることがわかる。

#### 4-2-2 親：安定した生活を実現することができる体制内の仕事を理想とする

対象者の親もまた、対象者と同様に安定かつワークライフバランス志向を抱いていた。対象者の話によると、むしろ親のほうが自分よりも職業の安定性を重視し、体制内の仕事を希望しているようである。親にとって娘が体制内の職業に就くことは娘が経済的に自立し、仕事と家庭の両立を実現できることを意味している。例えば、王さんと衛さんは以下のように語った。

(私が公務員に受かったことは)母の誇りになった。何故なら、それは私が(生活の)安定性を手に入れたことを意味しているから。母は私を就職の手本として周りに宣伝した。それで従姉妹たちもみんな税務関係の専攻(がある大学)に進み、(その後)公務員試験を受けて合格した。(王さん)

親は私に「(体制内の仕事は)女の子にとって経済的にも、仕事と家庭の両立という意味でも楽だ。あなたには大金を稼ぐことを期待していないから、安定した生活を送ることさえできればよい。(その方が)私たちも安心できる」と言った。(衛さん)

このように王さんと衛さんの親は女性が仕事を持つことに対して異議を唱えはしないが、同時に娘のキャリア形成に対しても、さほど期待していないのである。「女の子」「安定」「ワークライフバランス」という表現からも分かるように、親は娘の就職についてそれだけを独立させて考えることはなく、娘の今後の人生、つまり結婚や出産との連関のなかで捉えている。また親は娘の仕事に経済的な自立だけではなく、仕事と家庭の両立も同時に求める。言い換えれば、親は就職を娘が安定した収入と生活環境を入手するための手段だと捉えているのである。こうした親の理想に対して、王さんと衛さんは次のとおり自らの心境を吐露した。

私はすごく「聴話(話を聞く)」な人で、それは「致命的」だね(笑)。私個人の意見があまりないから、これまで母の計画通りにやってきた。おかげさまで親の期待に応えることができたと思う。(王さん)

今でも「不思議」に思うが、なぜ当時の私はそんなに「乖(従順)」だったのだろう(笑)。(おそらく当時は)親は絶対に私を傷つけないし、(よい将来へと)最もよく導いてくれる(存在だ)と思っていた。(衛さん)

上記の語りからは、王さんと衛さんは親の期待に応えることができた「いい子」として自らを評価すると同時に、自身の振る舞いについて、それぞれ「致命的」で「不思議」であると考えていることもうかがえる。本稿冒頭で述べたとおり、「大人」とは自分の人生を自分の意思で決めていく存在だと理解してはいるものの、本稿の考察の結果から分かったように、この2人は「大人」になることよりも、親を信じ、親の計画に従うことを選んだのだ。しかし他方で、親の期待に不満を抱き、親子の理想の間にズレが生じて葛藤した対象者もいた。

あの時、親と対立していたね。私は大学を卒業した後、香港〇〇大学の修士課程の試験に合格し、(同時に)公務員試験にも受かった。私は進学しようと思っていたが、もちろん心の中では公務員でも悪くないという気持ちもどこかにあったのかもしれない。

それで、うちの親、特に父は保守的な人だから、彼は「あなたは女の子だし、受かったのは公務員というよい職業だし、地元に戻りなさい」と言った。私は公務員になって、その現実を受け入れるまでには半年か一年くらいかかった。その間ずっと気分が晴れなかった。(沈さん)

大学に入ってから母がすぐに私の将来を計画し始めた。つまり公務員になるということ。でも、その時、私はバラエティ番組に参加していて、歌手としてデビューするチャンスを掴んでいた。一年休学して歌手をやってみようと思っていたら、母が「歌手は将来性がない。もし休学したら、これからの人生は他人より一年ずつ遅れてしまう」と言い、私の考えに反対した。私は母を説得しようと頑張ったが、やっぱり反対されたね。もちろん正直に言えば、私自身も歌手になることは(将来が)不安定すぎると思っていた。(結局)私は公務員になったので、母はすごく満足している。(魏さん)

このように沈さんと魏さんはともに就職をめぐる親と対立してしまったことがうかがえる。魏さんは歌手になりたいという夢を持っていたが、母親はそれを現実的ではないと否定した。そして進学か就職かで悩んでいた沈さんもまた、父親に地元に戻ってくるよう勧められたという。結局のところ、2人とも親の計画通りに公務員になったが、この結果からは、対象者は自分の親と同様に自身も生活の安定を重視し、夢のために安定した生活を手放すことは容易ではないと考えていることがわかる。

## 5. 考察

本研究では、一人娘の就職地と就職先の選択についての分析を通して、一人娘と彼女たちの親が考える理想的な女性のライフスタイルを考察した。その結果、40名の対象者のうち30名が大学を卒業したあと、地元に戻って就職することを選んだことが確認できた。こうした高い「Uターン」の背景には、対象者が就活をするうえで現実的な条件を重視する傾向があることを、本稿は指摘した。先述したとおり、生活コストや競争の激しい大都市での生活に比べて、地元での物的・人的資源が調達しやすく、経済的・精神的プレッシャーも少ない生活のほうが対象者にとって魅力的である。ここからは、紹興と杭州や上海のような大都市の間にライフスタイルの違いはもちろんのこと、経済の格差も存在することが指摘できる。また対象者は自分が唯一の子どもであることをつ

ねに念頭に置いているため、就職地を選択するときには、親の気持ちやニーズを考慮に入れる。事実、親の期待に応えることができなかった経験を持つ張さんは、過去のわがままな振る舞いへの反省から、親に対して強い責任感を示すようになった。他方、親も対象者の一人っ子および女性という2つの属性を重視する。親にとってたった一人の娘が他地域で就職することは、娘を「失う」ことであり、娘の今後の人生、つまり結婚や出産をサポートすることが難しくなることを意味する。このような考えから、多くの親は対象者が地元に戻って就職し、いままで通りの親密な親子関係を維持することを望んでいるのである。

つぎに就職先の選択においては、親と娘の両方が仕事に安定性とワークライフバランスを追求し、体制内の職業、とくに公務員を理想として考えていることを指摘した。ただし親に比べて対象者のほうが葛藤を抱えやすく、親と意見が合わないことがある。この結果は、本稿で取り上げたZheng (2016) の「一人娘である女子大学生の就業意識に関する調査結果」と一致しているが、本研究ではさらに一步踏み込んで、親と意見が合わないのにも関わらず、一人娘が親の期待に応えようとする原因を探った。それは本研究の対象である一人娘は一方では優れた教育を受け、高い学歴を修めているがゆえに、男女平等や自立した女性像を内面化しているものの、他方では、社会の不確実性や労働市場における女性への差別、さらには親からの期待を意識しなければならなかったからだと本稿は考える。こうした対象者は理想と現実とのギャップを抱えて、二者択一の選択を行わなければならない。しかし本稿の結果から明らかになったように、対象者は親と同様に自身が不安定な生活に陥ることを恐れ、夢を追うよりも、生活の安定性を確保することを優先した。そのため対象者は親の意見に賛同できないにもかかわらず「いい子」として振る舞った自分を「致命的」で「従順的」すぎると自己評価を下している。ここからも察せられるように、一人娘は最終的には親の考え方のほうが社会に適応し、正しい判断であると認めざるを得なかったといえよう。

このように1980年代に経済システムの転換を経験した中国では、人々の就職選択と地域間の移動が自由になったが、その一方で労働市場における女性差別や地域間の格差が広がりつつある。こうした現状にうまく対応するために、一人娘の親は娘により教育を受けさせ、高い学歴を修得させようと努力した。しかし本研究で明らかになったように、親は娘のキャリア上の成功というよりも、むしろ娘がいずれ結婚や出産をすることを想定し、ワークライフバランスが取れる、いわゆる安定性の高い職業に就くことを願って尽力した。また親は娘が自分のそばにいて、自分が娘に経済的・日常的なサポートを提供することを望むのと同時に、娘との密なコミュニケーションや情緒的な繋がりも求めて

いる。こうした親の働きかけからは、一人娘の親は娘に息子と同格の投資と関心を与えているとはいえ、依然として娘に中国女性が果たすべき役割（例えば、仕事と家庭との両立や、親に対する情緒的サポートの提供など）を求めていることが分かる。しかも親は娘にそれらの役割を単に果たすだけではなく、安定性の高い生活を実現するために、公務員試験という難関試験を突破し、体制内の職を得ることも求めているのである。ここからは、一人娘の親は娘に既存のジェンダー規範をこえて、娘に従来とは異なるライフコースを構築することを望んでいるというよりも、むしろ中国女性が歩む標準人生モデルを高い水準で達成することを望んでいることが指摘できる。他方、一人娘自身も今日の厳しい社会状況を見据えた上で、自らの力だけでは社会からの差別や福祉制度の不整備による二重負担を緩和・解消することが難しいことに気づいている。そのため、彼女たちは親と同様に、リスクを負って不安定な人生を送るより、親子の相互援助に基づく安定した家族生活を理想として考える。またこのような理想を実現するために、彼女たちは大都市から地元に戻って、体制内の仕事に就くことを選んだのである。

一人娘は一人っ子という属性に恵まれ、子どもの頃から親に大事に育てられながら、学校でジェンダー平等という意識を身に付けた。しかし一旦社会に出ると、彼女たちはほかの中国女性と同様に、労働市場でジェンダー差別をうける一方で、国家や家族からは引き続き妻および母の役割を求められる。こうした状況下にある一人娘は中国社会がジェンダー公正を推進していることの指標の一つとして、先行研究ではみなされてきた。とはいえ、いまだに彼女たちですら、従来のジェンダー規範をこえて自らが望む人生を歩むことよりも、むしろ自分の学歴と親からの援助を駆使して、安定性の高い人生を望む傾向にある。こうした一人娘の選択は、中国、さらに言えば同じくジェンダー格差が大きい日本や他のアジア諸国における女性の社会進出の難しさを示唆している。それだけではなく、彼女たちのライフスタイルは、女性が活躍できる社会に必要な一連の社会福祉制度がまだ整っていない実情も反映している。ゆえに女性が就職しやすい環境を整えることは、社会のジェンダー公正および家族成員の自立の実現のために重要であると考えられる。

以上、本稿では一人娘の就職に関する考察を通して、彼女たちとその親が考える女性の理想的なライフスタイルを検討した。ただし今回の調査は都市および対象者の社会階層を限定している。今後は調査地域と調査対象の社会階層を拡大し、より包括的な分析を行うことが必要である。

(ちん よせん 明治大学大学院)

謝辞：調査にご協力いただいた皆様と貴重なコメントをいただいた査読者の皆様に心から感謝を申し上げます。また本研究はJSPS科研費JK19K02052の助成を受けたものです。

#### [注]

- 1) 「統包統分」は計画経済期に国家が高等教育を受けた人たちに対して仕事を配分した制度である。この制度によって人々は就職と失業のリスクを回避できたが、職業選択の自由がなかった(張・沈2016)。
- 2) 計画経済期の都市部では、社会組織はそれぞれの「単位」に簡略化され、人々はその一つの「単位」に所属しながら、国家の管理・サービスを受けた。そのなかに生活保障がある。(譚・遠山1997)。
- 3) 中国における職業は大きく「体制内」と「体制外」の二つに分類することができる。「体制内」とは、政府機関、国営企業、国家資金で運営する学校、病院などである。従業員たちは、比較的安定した収入とよりよい福利厚生を享受することができる。その一方で「体制外」は主に民営企業や外資系企業を中心に構成される。従業員たちは国家からの管理を受けることは少ないが、職業の安定性が「体制内」に比べて低い。
- 4) 2021年8月の為替レートは1元=17円である。
- 5) 残りの2名はそれぞれ江西省と浙江省の某市の出身者であるが、本人の話によると、彼女たちが紹興に定住した理由は、経済的な要因ではなく、紹興で理想的な仕事を見つけたうえに、紹興人と結婚したからである。

#### [引用文献]

- Bauer, John. et al. 1992 Gender Inequality in Urban China: Education and Employment. *Modern China*, 18 (3) , 333-370.
- 辺静 2006「中国中年期女性の職業キャリアと家族キャリア：北京におけるインタビューからの一考察」『人間文化論叢』,9,377-387
- Bian, Yanjie 1994 Guanxi and the Allocation of Urban Jobs in China. *The China Quarterly*, 140, 971-999.
- 車雨璠ら2016「応届毕业生回流就業傾向逐漸明朗——2015年応届大学毕业生回流意願調査報告」『労働保障世界』,1,58-60
- Fong, Vanessa 2004 *Only Hope: Coming of Age Under China's One-Child Policy*. Stanford University Press.
- 杭州市人民政府2021「2020年度杭州市人民生活相関数据」

- 杭州市人民政府ホームページ [http://www.hangzhou.gov.cn/art/2021/2/24/art\\_805865\\_59029791.html](http://www.hangzhou.gov.cn/art/2021/2/24/art_805865_59029791.html) (2021年10月1日最終アクセス)
- 石塚浩美 2010『中国労働市場のジェンダー分析』勁草書房
- 小浜正子 2020『一人っ子政策と中国社会』京都大学学術出版会
- Kuan, Teresa 2015 *Love's Uncertainty*. University of California Press.
- Liu, Jieyu 2017 *Gender, Sexuality and Power in Chinese Companies: Beauties at Work*. Palgrave Macmillan UK.
- 李春玲 2016「“男孩危機”“剩女現象”与“女大学生就業難”——教育領域性別比例逆転帶來的社会性挑戰」『妇女研究论丛』, 2, 33-39
- 瀬地山角 1996『東アジアの家父長制：ジェンダーの比較社会学』勁草書房
- 上海市人民政府 2021「居民人均可支配及消費支出」  
上海市人民政府ホームページ, <https://www.shanghai.gov.cn/nw48810/20210225/87a85852140945fa87ba67b3eb9fb6e9.html> (2021年10月1日最終アクセス)
- 紹興市人民政府 2021a「紹興年鑒2020: 人力資源与社会保証」  
紹興市人民政府ホームページ, [http://zjjcmspublic.oss-cn-hangzhou-zwynet-d01-a.internet.cloud.zj.gov.cn/jcms\\_files/jcms1/web2247/site/attach/0/f23a63760bb548e9ab9a6a74ec645d58.pdf](http://zjjcmspublic.oss-cn-hangzhou-zwynet-d01-a.internet.cloud.zj.gov.cn/jcms_files/jcms1/web2247/site/attach/0/f23a63760bb548e9ab9a6a74ec645d58.pdf) (2021年7月14日最終アクセス)
- 紹興市人民政府 2021b「紹興市志 第4章：人口構成」  
紹興市人民政府ホームページ, <http://www.sx.gov.cn/col/col1462610/> (2021年7月14日最終アクセス)
- 譚深・遠山日出也 1997「単位体制と中国女性」林玲子と柳田節子監修『アジア女性史』, 明石書店, 119-130
- Xu, Qiong and Yeung, Wei-jun Jean 2013 Hoping for a Phoenix: Shanghai Fathers and Their Daughters. *Journal of Family Issue*, 34 (2), 184-209.
- 張青根・沈紅 2016「“一紙文憑”究竟價值幾許?——基于中国家庭追跡調查数据的实证分析」『教育發展研究』, 3, 26-35
- Zheng, Jiaran 2016 *New Feminism in China: Young Middle-Class Chinese Women in Shanghai*. Foreign Language Teaching and Research Publishing Co., Ltd and Springer Science+Business Media Singapore.
- 中国婦女社会調課題組 2021『第四期中国婦女社会地位調査主要数据情况發布』  
中華全国婦女連合会ホームページ, <https://baijiahao.baidu.com/s?id=1720364474098182308&wfr=spider&for=pc> (2022年1月23日最終アクセス)
- 中国国家統計局 1999『新中国50周年系列報告之十五』  
国家統計局ホームページ, [http://www.stats.gov.cn/ztjc/ztfx/xzg50nxfxbg/200206/t20020605\\_35973.html](http://www.stats.gov.cn/ztjc/ztfx/xzg50nxfxbg/200206/t20020605_35973.html) (2022年1月23日最終アクセス)

中国国家统计局 2021 『2020年居民消費与支出狀況』

国家统计局ホームページ, [http://www.stats.gov.cn/tjsj/zxfb/202101/t20210118\\_1812425.html](http://www.stats.gov.cn/tjsj/zxfb/202101/t20210118_1812425.html) (2022年1月23日最終アクセス)

中国国家统计局紹興調査隊 2021 『2020年紹興人均可支配収入和消費支出支出』

国家统计局ホームページ, [http://zjzd.stats.gov.cn/sx/dccg/dcsj\\_315\\_1\\_1/202102/t2020208\\_98980.shtml25.html](http://zjzd.stats.gov.cn/sx/dccg/dcsj_315_1_1/202102/t2020208_98980.shtml25.html) (2022年2月15日最終アクセス)

鐘曉慧・郭巍青 2018 「新社会風険視角下的中国超級媽媽——基於広州市家庭兒童照顧的実証研究」『婦女研究論叢』, 146, 67-78

Zuo, Jiping 2012 Understanding Urban Women's Domestic-Role Orientation in Post-Mao China. *Critical Sociology*, 40 (1), 137-162.

(2022年9月25日掲載決定)

# Modern Chinese Women's Lifestyle and Parent-Child Relationship from the perspective of One-Child Daughter's Employment: A Case Study of Shaoxing, Zhejiang Province

CHEN Yuqian  
(Meiji University)

As the "Only Hope" of the family, One-Child daughters born under China's One-Child policy are their parent's main focus receiving ample investments from their parents while in return being expected to acquire a sophisticated level of education and to find a well-paid job. However, having entered the labour market – as it's the case for the majority of China's working women – many are met by gender discrimination and fail to meet their parent's expectations. This study examines the ideal lifestyle and parent-child relationship according to Chinese One-Child daughters and their parents by interviewing One-Child daughters about their employment. The results show that both, One-Child daughters as well as their parents, are self-aware of their daughter's status as a female only-child and show that both want One-Child daughters to return to their home city to get employed "within the system" as civil servants. Furthermore, both see a lifestyle that allows a safe and sound work-life balance as their ideal lifestyle and prefer a close and supportive parent-child relationship. In light of this, a One-Child daughter's employment serves an important role in achieving the ideals of a One-Child daughter and their parents.

**Keywords:** One-Child daughter, employment, lifestyle, parent-child relationship